

世界に広まった伊万里焼

大船高校 早川英昭

日本で有数の磁器の産地、佐賀県有田町の焼物は、かつては積み出し港の名前を取って「伊万里焼」と呼ばれた。その「イマリ」は大航海時代のオランダ船で、遠くヨーロッパに運ばれ、一大ブームを巻き起こした。その後ヨーロッパではイマリのコピーを作ることになり、一八世紀になってようやくドイツのマイセンで、イマリ風の磁器を作ることができたのである。ではこの伊万里焼とは、どんな焼物であったのだろうか。

私たちが日ごろ使っているカップや皿、茶碗などの多くは、白く滑らかな焼物で、叩くとチーンと金属のような音がする。これが「磁器」で、最も高い温度で焼かれている。そのため硬く、薄手に作れ、中には透けて見える物もある。今では世界中で作られているが、昔は中国だけでしか作れない特産品であった（そこで磁器のことを英語で china とも言う）。焼物自体は一万年前から作られているが、数百度の低い温度で焼く「土器」の時代が長かった。その後各地で、より良質な粘土を使い、登り窯などで一二〇〇度前後で硬く焼き上げる「陶器」が作られるようになった。ほとんどの陶器は釉薬をかけて透水性を無くし、土器よりずっと実用的であったが、焼き上がりに色があり、まだもろさもあり、厚手であった。硬さを求めて更に温度を上げて焼くためには、高温でも熔けない土が必要であったが、それを発見したのが宋代の中国であった。カオリン（高嶺）と中国の地名が付けられている白い陶石（磁石）がそ

れで、これを砕いて粘土とし、一二三〇度以上で焼くと、硬くても白い透き通るような「磁器」となった。それ以前から、陶器に厚い灰釉をかけ還元炎で焼き上げて、青や緑を発色させる玉のような「青磁」が作られたり、白い陶土に透明釉をかけて焼き上げる「白磁」などが作られていたが、ようやく宋代になって胎土が磁器である青磁や白磁が盛んに作られるようになったのである。元代には西アジアからもたらされた酸化コバルトを顔料にして白磁に青い模様を描き、透明釉をかけて焼き上げる「染付（青花）」が作られるようになった。また明代になると、白磁や染付の上に赤黄緑などの彩色をして二度焼きをする「色絵（赤絵）」も作られ始めた。これらの技法を模倣できたのは、朝鮮とヴェトナムくらいで、「高麗青磁」「李朝白磁」「安南青磁」「安南染付」は日本でも珍重された。そしてこれらの磁器は、中国船はもとより琉球船でも東南アジアに運ばれ、更にイスラム商人の手を経て西アジアにももたらされた。ヨーロッパには少しは入っていたが、とても貴重品であった。

一六世紀の大航海時代にアジアに進出したポルトガルは、香辛料や綿織物の他に、この中国の磁器も求めたが、まだ少なかった。大量に買い付けを行ったのは、一七世紀からアジア交易に参入したオランダであった。豊かになってきていたヨーロッパの王侯貴族や市民は、この美しく貴重な磁器を争って求めた。新しくもたらされた嗜好品の紅茶やコーヒーを磁器のカップで飲み、美しい絵皿や壺を部屋一杯に飾るのを誇りにした（この流行はシノワズリーへ中国趣味と言われた）。オランダは磁器の最大の生産地である江西省の景德鎮に、ヨーロッパ好みの大皿などの品を注文した。しかし、折から起こった明の滅亡（一六四四年）と清の征服、そしてその清に

抗する鄭成功らの戦いの中で、中国磁器の輸出が中断してしまつた。海上貿易を資金源としていた鄭氏勢力は、東南アジアとの貿易の主力商品である中国磁器の代替え品を必要とした。それはオランダも同じであつた。そこで彼らが目をつけたのが伊万里焼であつた。

豊臣秀吉の朝鮮侵略の時、肥前鍋島氏が連れて来た陶工の李參平（金ヶ江三兵衛）が、一六一〇年代に有田の山中（泉山）で陶石を発見し、日本で初めて磁器が焼かれ始めた。佐賀鍋島藩は、一六三七年有田の窯場を整理し、磁器生産だけに切り変へさせた。大量の染付が作られ、国内に販売された。そのすぐ後に中国での政治的大変動が起こつたのである。清軍が南京を陥落させた一六四五年には中国磁器の輸出が激減した。そして一六四七年にはほぼ輸出は停止してしまふ。鄭氏勢力はその年に、有田の磁器を買い付け、東南アジアに向けて輸出し始めた。また同じ頃、長崎の中国人技術者の指導で、酒井田柿右衛門が中国の色絵の模倣に成功した。こうして有田焼⇨伊万里焼は国内向けの製品のほか、外国向けの注文製品を大量に生産するようになった。オランダ東インド会社も一六五〇年から伊万里焼の輸出を始め、バタヴィアなど東南アジアに送り、一部はヨーロッパに送られた。一六八〇年代初めまでの輸出総量は、中国船でバタヴィアへ運ばれた分だけでも約二〇〇万個、オランダ船も同じく約二〇〇万個と言われている。その伊万里焼は、初めは朝鮮的技術で焼かれたが、輸出が盛んになると、中国的技術と中国様式の絵付けが取り入れられた。しかしいわゆる「柿右衛門様式」と言われる余白を残した日本独特の意匠の磁器も作られるようになり、これは特にヨーロッパで珍重された。台湾を拠点とし、最後まで清と戦つた鄭氏が一六八三年屈服すると、翌年海禁令（遷界令）

が解かれ、中国磁器の輸出が再開された。伊万里焼の輸出は減少し、中心は国内向け生産に変わつていったが、これ以降もオランダ出島貿易の個人取引として、かなりの量の伊万里焼が輸出され続けた。そこでヨーロッパでは、東洋からの磁器の意匠は日本風が基準となり、ヨーロッパ向けに生産を再開した景德鎮の磁器は、柿右衛門様式の模倣をした（チャイニーズ・イマリ）。

さて、莫大なお金で磁器を輸入し続けていたヨーロッパは、何とか自前で生産出来ないかと努力した。オランダのデルフト焼きのように、白い上塗りをした陶器に柿右衛門様式の絵付けや中国風文様を付けてみたりしたが、焼物自体はもろい物だつた。ようやく陶石（カオリン）を発見し、磁器を焼くことに成功したのは、一七〇九年、ドイツのザクセン王国の「マイセン窯」であつた。何と彼らが白いかつらに使用していた粉がカオリンであつた。この技術は秘密にされたが、技術者の引き抜きで数年後にはウィーンで焼かれ始め、半世紀もたたない内に全ヨーロッパで磁器の生産が始まつた。

《参考文献》

『海のシルクロードを求めて―東西やきもの交流史―』

三杉隆敏 創元社

『やきもの鑑定入門』

出川直樹監修 新潮社

『マイセンへの道―東西陶磁交流史―』

三杉隆敏 東京書籍

『アジアの海と伊万里』

大橋康二 坂井隆 新人物往来社

『中国古陶磁入門』

中島誠之助 平凡社

『マイセン―秘法に憑かれた男たち―』

ジャネット・グリーン 集英社